

## 現代民俗学への一視点 — ドイツ語圏の民俗研究との比較において —

河野 真\*

### 前 言

「現代民俗学」は成り立つのであろうか。一例を挙げると、ウィーンでは「現代民俗学研究所」(Institut für Gegenwartsvolkskunde) という機関が活動をつづけている。運営の主体は「オーストリア・アカデミー」であるから、間接的には国立の施設ということになる。設立されたのは1970年であったが、これは永年の運動が実ったものなので、それよりもかなり前から、そうした方向への構想があったのである。また経験的文化研究 (Empirische Kulturwissenschaft) や、日常研究 (Alltagsforschung) など、同様の方向を指している。以下では、これらについて簡単な案内を試みると共に、併せてこれに対応する日本の動きの特色を考えてみたい。

### 1. 日本の現代民俗研究への寸感

柳田国男『明治大正史世相篇』にちなんで

民俗学が現代社会をもけっておろそかにしてきたのでないことが強調される時、その頂点に立つものとされてきたのが、柳田国男の『明治大正史世相篇』(昭和6)である。これが一般的に見ても名著であることは否定できない。しかしこれを起点として民俗学が現代社会を積極的にあつかいはじめたわけではなかった。今和次郎の考現学も、柳田国男とのあいだに齟齬をきたしていたとされており、『明治大正史世相篇』は、日本の民俗研究者にたいしては、その方向への指針というよりは、一種の境界線の役割を果たしてきたように思われる。それはまた、柳田国男の民俗学の構想ともからんで起きた事態であった

※愛知大学教養部教授

あろう。

都市民俗学における民俗の概念

民俗学のなかで現代社会が問題となる度合いがたかまった頃、議論は先ず都市民俗学の可能性に集中したようである。それはまた柳田民俗学を受け継いだ問題の立て方でもあった。そこで、ひとつの問いが浮上した。曰く、〈都市に民俗ありや無しや〉(『民俗学評論』16, 昭和53所収のシンポジウム記録。)

こういったときの〈民俗〉とは、何を指しているのであろうか。民俗とは、民間伝承と同義という解説がある(『民俗学ハンドブック』)。また慣行習俗や慣行的生活のことであるという見解もある(和歌森太郎「日本民俗学概説」)。また民俗学が英語のフォークロアやドイツ語のフォルクスクンデのことであるという説明も一般的である(上記両書)。となると、民俗は、folk culture ないしは Volkskultur のことになる。しかし、先の疑問命題をこれで置き換えるとどうであろうか。〈都市に慣行的生活ありや無しや〉、〈都市にフォーク・カルチャーありや無しや〉、これがいささか奇妙な問いであることはあきらかであろう。ここからみると、民俗という概念は、慣行的生活やフォーク・カルチャーの全体を指しているのではないことになる。その一部、ないしは全体ではあっても、ある特定の側面からみたかぎりでの慣行的生活やフォーク・カルチャーということなのであろう。

民俗学をめぐるのはこれと同種の問題がいくらか起きてくるように思われるのであるが、その面から私見を言えば、柳田国男の仕事は、文学における谷崎潤一郎の努力と似ていると

ころがある。この作家はただひとつの目的のために、禁欲的なまでに規律的な生活を自己に課し、あまつさえ高野山にこもるまでして彫啄にいそしんだ、日本の伝統的な女性の美を造形するという目的のために、とは三島由紀夫の谷崎評である。同様に、柳田国男は、日本の庶民の伝統美の造形者であったと言えるのではなかろうか。ちょうど谷崎潤一郎が女性をめぐってあらゆることながらを書きはしたが、あくまでも伝統美の側面から描き出したように、柳田国男は日本の庶民をその伝統美の側面からひたすら描きつづけたのであろう。そこにその著作の時空を越えた魅力があると思われるが、ここから先の話題に戻ると、問題の設問は、〈都市に伝統美を資するがごときフォーク・カルチャーありや無しや〉ということになり、だいたい文脈は整ってくるのである。

#### 宮田・色川両氏の現代民俗研究にちなんで

昨今の日本民俗学では、現代社会に向かつて、多数の人々がさまざまな試みを公にしている(注-1)そのなかで、すでに一定の視点を確立し、それにもとづいて旺盛な執筆をおこなっているのが、宮田登氏である(「都市民俗論の課題」未来社1982、「現代民俗論の課題」未来社1982、「妖怪の民俗学」岩波書店1985、「江戸歳時記—都市民俗誌の試み」吉川弘文館 1981, その他)。

氏のばあいには、現代民俗をあつかうことが、都市民俗を相手にすることと強く重なっており、重心はむしろ都市におかれている。それゆえ、今日の世の中で発生しているミステリアスな事件と、江戸の町に発現したさまざまな怪奇現象を本質的に同じであるとの見方がとられている。都市が異常心理が起きやすい場所であるから、と言うのがその理由である。またこの異常心理とほぼ同じ意味で、氏は、都市住民のもつ不安に強く注意をうながしている。

この考え方は、〈衣食住の材料を自分の手で

作らぬといふこと、即ち土の生産から離れたといふ心細さが、人を俄に不安にも又鋭敏にもした〉という柳田国男の都市ならびに都市民理解を土台にしており、またそれを独自に展開させたものでもある。宮田氏は、辻、橋、境、渡し場などで人間がおそわれる異常心理や不安感を指摘しているが、都市とは、そうした不可視の場が幾重にもかさなっている空間であり、それゆえたとえ東京にもっとも多く怪異な現象が起きるのは少しも不思議ではない、と説いている。柳田国男においては、〈自ら耕し織らざる者〉が抱く不安というように、不安や異常心理の内容はまだ限定されていたが、それを無限に広い意味でとったところに、氏の特徴がある。ハレ・ケ・ケガレなどの民俗的思念の継続なども説かれはするが、中心は何と言っても、都市は不安や異常心理の場所であり、したがってそこでは怪異な現象や衝動的犯罪が発生するという論法である。

ところで注目すべきは、これと基本的には同じ考え方が、色川大吉氏の『昭和史世相篇』(小学館1990)でも柱になっていることである。色川氏のばあいには、時代ははるかに現代に近いところに設定されており、その関心もより多く社会の変動や社会的な事件に向けられている。また独特の反権力への情熱が行文を彩っているが、推論のあり方に限定すると、そこにはひとつの型があることが分かる。たとえば高度成長による都市改造や大住宅団地の造成、また交通革命や消費革命や情報革命、これらは〈日本列島を吹きまくった「近代化」の嵐といい換えてもよい。この嵐に直撃された人々の多くは心の安定を失った〉(p. 82/83) というふうには、社会のドラステックな変化を活写し、それによって庶民が〈不安〉に追いこまれるというところへまとめてゆき、これを展開軸にして、異常な事件を配置するという仕組みである。つまり、不安とその類義語(孤立感、脱落感、不信、異常心理など)

が折り返し点の役割をしており、ここまですれば、校内暴力も、金属バット殺人も、熟年男性の自殺も、イエスの方舟も説明がついたという構図である。

民俗学と民衆史研究の二人の代表者が、基本的には同じ構図によって、現代の現象や都市の現象を説明しているのは、たいへん興味深いことである。この構図は、柳田国男の都市・農村の対比にかんする見解を土台にして、それを僅かに動かしたところに成り立っている。しかしその僅かな重心移動によって、これまでは視野の外に置くしかなかったさまざまな現象が射程に入ってきたところに大きな意義がある。これはまた今日の日本における現代民俗研究の到達点でもあろう。しかしまた同時に、都市民や現代の民衆の不安・異常心理を指摘することが、現代の怪異現象や、意外性のある犯罪などの必然性を説明したことになるのだろうか、という疑問もつきまとうのである。

## 2. ドイツ語圏の現代民俗研究への小案内

一般的に言っても、日本とドイツは、世界でも稀にみるくらい民俗学の盛んな国であろう。しかし近年におけるその様相には、かなり大きな隔たりができています。目につく点で言えば、ドイツでは日本のように民俗学の本が一般書として書店に並んでいたり、よく読まれたりするといったことはあまり多くない。しかし他方では、大学では民俗研究がかなり盛んにおこなわれている。

ドイツ語圏のうちドイツについてみると、総合大学が約40校、そのうち約30校に民俗学科がもうけられている。しかし意外に受けとめられるかも知れないが、その半数ほどは最近設置されたのである。1950年代前半まで遡ると、民俗学科を設置している大学は2校にすぎなかった。それが1968年の〈異義申し立ての年〉(日本の大学紛争にあたる)あたりが転機となり、これにつづく1970年代の大学の

機構改革のなかで、その波に乗るかたちで次々に設置されていったのである。またたんに設置されただけでなく、中心になっている数大学では専攻登録者が常に800人とか600人を数えるというように、小さな学科にしては人気をあつめている。

### 最近の学会テーマにちなんで

ではそこではどういう研究や教育がおこなわれているかであるが、(歴史的な研究も軽視されているわけではないが)、今、問題にしている現代民俗学にあたるような傾向が優勢なのである。それをうかがう一助として、この数年のドイツ民俗学会の大会のテーマをみると、1991年は「工業社会のなかの人間」であった。しかしこれもこの時点ではじめてあらわられてのではなく、その企画書によると、工業社会民俗学が提唱されてから約40年になるが、このあたりで回顧とこれからの展望をおこなおうという趣旨であった。また87年の大会は「文化接触と文化摩擦」で、異文化間の交流を、古くは18世紀あたりのヨーロッパと植民地との関係や当時の旅行記録まで遡り、新しいところでは外国人労働者の問題が主要な話題になるといった様子であった。(注-2)また先の91年の大会は、ちょうど外国からの難民流入が激化するなかで、外国人排斥の風潮が頭をもたげはじめた頃でもあったが、若手の研究者たちが、この問題を集中的にとりあげることをもとめたために騒然となり、予定の発表をこなしながら3日間にわたって深夜まで討論がつづくといういささか異常な事態になった。93年は、これを受けて「暴力と文化」が大会のテーマに上がっている。

### 歴史的経緯

もっとも少し突っこんで見ると、必ずしも活気にあふれているわけではなく、行き詰まりやマンネリ化も目につきはするが、日本の民俗研究との違いは想像できよう。ではいつ頃から今日の傾向に変わってきたのであろうか。先の動きからも予想されることであるが、

70年代に先立つ1950年代後半から60年代を通してが、現代社会を正面から問題にするという今日の方法論が練り上げられた時期といえる。またその変貌に、70年前後の時期に一般社会も価値をみとめたのであった。特に、この現代社会へ向けての転回が、ナチズムの批判的解明と一体になって推進されたところから、ドイツ人の良心の証かしという意味ももったのである。

そもそもドイツ語圏で民俗学の見直しが大きな課題になったのは、第三帝国時代に民俗学が大勢としてナチズムへの協力に走り、そのため戦後は、連合国がそれをとがめたことも手伝って、社会的な信用を失墜したためであった。また外部との関係がそうだけでなく、内部的にも、1945年以前の民俗学の成果は、資料的にはともかく、理論的にはほとんどすべてがもはや指針にはなりえないという深刻な事態が発生した。この専門学としての存亡の危機のなかで、規模の大きい学究が何人も輩出して、他の専門学では代替できない民俗学の固有の存在理由をさぐり、再建にみちびいたというのが概括的な経緯である。ここでは、話題を極限にまでしぼって、三人だけをとり上げる。リヒャルト・ヴァイス、レーオポルト・シュミット、ヘルマン・パウジンガーである。(注-3)

リヒャルト・ヴァイス (Richard Weiss 1907-62)

ヴァイスは、ナチズム民俗学に巻きこまれないためには、民俗学の伝統とは思い切って距離をおくしかないとの考え方に立って戦争中から考察を進めていたが、その成果を大部な『スイスの民俗学』として戦後早々の1946年に刊行した(注-4)。これは、特定地域の民俗研究にとどまらず、方法的にも画期的であった。彼の行き方は、機能主義と呼ばれ、文化人類学のマリノフスキーの方法を民俗研究に応用したものとされている。それによると、社会のなかでの人間や人間集団がおこなう活動、ならびにそれによって満たされる課題の

全体値は、歴史の展開によって量的には増大するものの、質的にはある種の一定性をしめしていると言う。そこでたとえば民俗衣装について、それが被服慣習において主要な位置を占めていた時代に果たしていたさまざまな機能と、今日の時代にファッションが果たしている諸々の機能とのあいだで対応関係をみとめることができる。同様に、ある種の民俗行事や祭り行事と今日のスポーツやスポーツ祭典のあいだには、機能面では平行ないしは相似の関係をみることが出来る。このようにしてヴァイスは、民俗学が従来対象としてきた伝統的な文物と今日の社会の文物をかなり総合的に対照させたのであった。ヴァイスの考察は、こういう簡単な紹介ではいかにも図式的な印象をあたえるかも知れないが、スイスの民俗全般にたいする類まれな知識者であっただけに、具体例の挙示がまことに鮮やかで、説得力に富んだ名著である。また過去の民間習俗の何が、現代の何に対応するかといったアプローチの仕方も、民俗学が現代社会をとりあつかえるようになるためには、一度は通過しなければならない試みであろう。

レーオポルト・シュミット (Leopold Schmidt 1912-81) (注-5)

シュミットは、戦後のドイツ民俗学の第一世代を代表する人物と言ってよい。すでに戦前に、都市民俗学の指標となった『ウィーン、その都市民俗学』を書き上げるなど早熟ぶりを発揮していたが、兵役と戦争捕虜の5年間の空白後に戦後まもなくの学界に復帰し、「オーストリア民俗博物館」を拠点にして、多方面の活動を開始した。始めに挙げた「現代民俗学研究所」も、彼の構想のひとつが実現したものであった。

現代社会の方向でのシュミットの研究の特色は、その方面での著名な論考のタイトルにちなんで〈信仰なき習俗〉と呼ばれたりする。これは、習俗の連続は、それを支える心意の連続を意味せず、むしろそこで起きている変

化が重要であるという考え方の故である。今、一例だけを挙げておくと、火葬が現代のヨーロッパで急速な広まりをみせていることは一般にもよく知られているが、これに関して彼の論考がある。(注-6) 火葬は、19世紀を通じて社会主義者による批判的姿勢の徹底(煉獄のイメージへの反抗)がひとつの牽引力となって定着したが、すでに社会主義思想のなかにも伏流として存在したロマン的な世界観がしだいに優勢となり、自然のなかへ帰るという理解へ移行していった。シュミットは、前者ではエンゲルスの火葬を中心に据え、後者では今世紀を代表するオペラ歌手、マリア・カラスの遺骨が故郷のエーゲ海に撒かれ、これがまた火葬・散骨のブームを惹き起こしたことを跡づけながら、火葬のもつ意味の構造的変動を説明した。

ヘルマン・バウジンガー (Herman Bausinger 1926~)

今日に直接つながる動きとして挙げなければならないのが、バウジンガーであるが、ヴァイスやシュミットの行き方をさらに乗り越えようとするモチーフをもって登場した点では、戦後でも第二世代と言うことになる。彼は、始めドイツ語の方言研究を志し、急激な人口移動のなかで、言い回しやアクセントにいかなる変化が起きているかに関心を示したが、やがてそうした言語変動の基盤的現象でもある引揚民を対象にした民俗学に進んで、その方面での新機軸によって注目され、また技術機器や宝篋の民話、また起業家伝説など現代民話の分析をおこない(学位論文)、さらに伝統的な文物が今日の状況のなかでいかなる状態にあるかについて一般法則を問題にするようになった。その著書『科学技術世界のなかの民俗文化』が教授資格申請論文としてチュービンゲン大学に提出されたのは、1959年であった。(注-7)

この著作は、次のような目次からできている。第一章「自然な生活世界としての科学技

術世界」、第二章「空間の膨張」、第三章「時間の膨張」、第四章「社会の膨張」。科学技術世界とは熟さない訳し方も知れないが、ここでいう世界はハイデッガーの用語「世界内存在」とも重なった使い方で、科学技術にもとづいた諸々の機器にとりまかれた今日の一般的な人間の存在のあり方をさしている。科学的な技術機器は、伝統的な生活世界の破壊者とか異物といった見方がされることが多いのは日本も欧米諸国も同じであるが、バウジンガーはそういった先入観にとどまるのではなく、生活者の意識のなかに科学技術機器がどのように定着しているかを構造的に把握しなければならぬということから出発した。そして特にかつての民間習俗を支えていた心意と科学的な技術機器とがぶつかったときに何が起きるかについて、いくつかの基本的な脈絡を抽出した。民俗の心意と科学技術との対立的関係だけでなく、科学技術が生活者にとって親しい環境に変わってゆく過程、また科学技術や科学的思考と民俗的・魔術的・呪術的思念の相互交替、科学技術による民俗的・魔術的・呪術的意念の惹起や増幅などである。(参考までに科学技術の呪術への移行をとりあげると、たとえばたいいていの医療行為には多少ともそれが混じっている。患者は、注射をしてもらえば安心というふうに、科学知識に呪術的な思い入れをしている。また役所の窓口などで、コンピューターへの入力ですんでいてもはや受け付けはできないなどと言われると、いかにももっともに聞こえる。技術機器が手作業以上に生活の便宜に奉仕するという本来の性格からそれて、儀式性を帯びたのである。)

次いで、生活世界の一般的な変動として、空間、時間、社会のどの次元においても(地平の崩壊)が起きることが論じられる。変化の原動力は、科学技術の産物である。たとえば自動車や電話といった交通手段や通信手段が浸透することによって、かつての狭域的な空間には孔があき(たとえば隣村や隣町の意義

は根本的に変わってしまう), 遂に破裂現象を起こして崩壊する。こうした地平の崩壊を, 先に考察しておいた民俗世界と科学技術世界との関係と照らしあわせながら, 空間, 時間, 社会の軸ごとに基本的な変化をとりだしたのである。—たとえば空間的地平の崩壊に対する退行的現象として〈ふるさと〉の観念が擡頭するが(退行 regression はもとは心理学用語, 幼児が弟や妹の誕生にともない, 親の愛情をもとめるなどのために, 食事や排泄といった生活習慣を確立以前の状態に逆戻りさせる防衛機制), 表面上の狭域性とはうらはらに一国規模の画一化に向かってひたすら拡大するところにその本質があり, このため国家レベルの政治とたやすく結びつき, またその観念性のゆえに望郷とエキゾチシズムのあいだで互換性が起きる, といった考察である(第2章4節「ふるさと」)。

バウジンガーのばあいは, ドイツ語圏の多くの民俗研究者のひとりという以上の意味も持っている。というのは, 近年の各国の民俗研究は, バウジンガーを中心としたグループの高波を多少とも被ってきたからである。70年代末に氏がアメリカに滞在して諸大学で講演をおこなったことも, もともと現代社会に傾斜していたアメリカの民俗研究にたいして刺激になったとされている。バウジンガーが, 現代民俗学のために, 心理学や生化学や経済学分野から転用した用語類も, 今日ではその英語形で世界的に使われるようになっていく。さらにその著作がヒントになってつくられたフォークロリズムの概念などもある(提唱者はハンス・モーザー)。(注-8) これらが今日の民俗研究にたいして意義を強めていることは, 欧文によるすべての民俗学文献の情報案内をめざした『世界民俗学文献目録』(International Folklore Bibliography, 隔年刊で平均して毎号訳7000点を載せている)によってもうかがうことができる。

資料センターについて

現代民俗学において, もうひとつ見逃せないのが資料の問題である。現代の民衆文化ということであるから, そこでおこなわれるのは, めずらしい事例を探索し, それを既知の諸関係のなかに位置づけるという通常の民俗研究の操作とはかなり違ったものになってくる。むしろあふれるばかりの材料をどのように整理するかが, 問題になる。しかしまた大局的にはあふれるほどであっても, 実際には系統的な収集が困難であるという事態も生じる。それは, 特に新聞や週刊誌を材料にするばあいであろう。これらが重要な材料になることは, たとえば色川氏が『昭和史世相篇』のなかで, 〈年間数億冊も出している週刊誌やコミック誌…現代科学である民俗学はこうした通俗誌の分析を通して民衆の情動をとらえることを避けてはならない〉(p. 37)と指摘している通りである。この指摘は重要ではあるが, 日本では早くから大衆誌の価値をみとめて収集につとめた事例がある。その最大のもの, 「大宅壮一文庫」であろう。大宅壮一の「がらくた文庫」が今日のかたちで発足したのは1970年であるが, この時期には, 各国で, この種類の資料への着目と収集がはじまったということができる。

なぜこれに言及するかというと, ドイツ語圏のばあいは, 日本の大宅壮一文庫のような収集を中心になって推進したのが, 民俗研究者だったからである。(注-9)

その代表例のひとつが, はじめに挙げたウィーンの「現代民俗学研究所」である。ただし民俗研究が必要とする情報量は, 現代の世相全体を射程においたばあいの情報収集に比べれば, その数パーセント程度のものであろうから, これも小さな施設である。しかしそうした小規模な資料センターが各地方に存在するのが特色である。また情報の種類を選択しているだけに, どのあたりの現象に注目することが, 何をあきらかにすることにつながるかという指針的な理論や仮説が重みを

もつことにもなる。(注-10)ともあれ、先にふれたこの20年ほどのあいだの民俗学科の新・増設のさいにも、そうしたセンターが併設された事例が見受けられる。そこにはまた教育システムとの重なりもある。演習の教材にはヴァイスやバウジンガーのスタンダード・ワークがよく使われ、また担当教授の理論にも接するが、それらを実際に応用する訓練がしばしば課せられる。そのときに活用できるような資料室が存在するかどうかは、さまざまな意味で重要な目安になる。充実した資料センターが併設されており、また教授たちが、活用すべき項目まで指示できるようなところでは、学生たちはかなり高度なレポートをたやすく作成することができ、またそういう大学に学生たちは集まることになる。またこれは当然にも、研究活動にもあてはまる。現代民俗学分野において、まとまった研究が毎年数多く生まれてくるというのも、こうした資料センターが各地に存在することが下支えになっているのである。

#### おわりに

今日のドイツ民俗学の基本的な理論がつくられたのは、ヴァイスの主著が刊行された46年からイーナ＝マリーア・グレヴェルス女史の『テリトリー的存在としての人間』(注-11)が出た72年あたりまで、つまり敗戦による過去の指導理論の瓦解が直接のインパクトになった四半世紀であった。それを土台にして70年代以降に民俗学科の新設・増設があり、大学紛争以後の世代の感覚や社会情勢に対応した動きへとつながっていった。しかしその普及にあたっては、ナチズム批判ともからんで、昔のおもかげを残した研究姿勢を残存物を誇大宣伝するものとして悪役にし、それを弾みにしてきた面もある。このため、世間に広くみられる古くからの民俗学愛好の流れと、アカデミズムとしての民俗学のあいだにはかなりひらきができていく。ちなみに最近では

ヴェーバー＝ケラーマン女史(1918\*)の『19世紀ドイツの農村生活』(注-12)がこの分野ではめずらしくベストセラーになったが、農村の慣行習俗はけっして古来の民俗的思考に貫かれているのではないとの自説を説きながら、広く民俗学愛好家をも満足させているのは、ドイツ民俗学の方のリーダー(マールブルク大学のグループ)の力量であろう。

日本の民俗研究者のあいだにも、こうした外部の動きにたいする関心がでてくるのが望ましいと私などは感じているが、詳しい情報を欠いたまま過大な予想をするのも、これまた意味がないことである。むしろ、一般に人文・社会科学がおおむね欧米の動向に権威や規範も見てきたのにくらべると、日本民俗学が固有の展開を遂げ、独自の思考や価値観を培ってきたのは貴重なことであった。とは言え、たとえばハイネの『神々の流謫』(岩波文庫)のような、ドイツにおいて民俗研究の重要文献として評価されたためしがないものが、柳田国男がヒントにしたという理由のために古典視されるところまでゆくと、いささか強引ということにはなるであろう。

#### 注

- 1) 主な成果には次のものがある。金沢民俗をさぐる会編著『都市の民俗・金沢』(国書刊行会 1984, 1983年までのこの分野の文献について詳細な目録を併載している)、小林忠雄『都市民俗学—都市のフォークソサイエティー』(名著出版 1990)、倉石忠彦『都市民俗論序説』(雄山閣 1990)、岩本通弥・倉石忠彦・小林忠雄編『都市民俗学へのいざない』2巻(雄山閣 1989) 神崎宣武『観光民俗学への旅』(河出書房新社 1990)。社会学の観点からの成果も多数に上るが、ここでは高田公理・野田正彰・上野千鶴子他著『現代世相探検学』(朝日新聞社1987)を挙げておく。また注目すべき誌上論考に次が

- ある。高桑守史「都市民俗学」(『日本民俗学』124, 1979), 大月隆寛「『都市民俗学』の本質的性格」(『日本民俗学』157/8, 1985)。
- 2) 次の大会記録が刊行されている。Ina-Maria Greverus/Konrad Köstlin/Heinz Schilling, Kulturkontakt und Kulturkonflikt, Zur Erfahrung des Fremden, 2 Bde. Frankfurt. a. M.1988.
  - 3) ドイツ語圏における民俗研究の発達については、次の学史案内を訳出しておいた。インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマン『ドイツ民俗学』(愛知大学「経済論集」117号以下)。これは著者を中心とするマルブルク大学の学派的観点からの整理という面があり、やや癖はあるものの、広く用いられている学史解説書である。その第ⅤⅡ章「第二次大戦後のドイツ民俗学」は1980年代始めまでをみつづけている。また次の拙論を参照、「ドイツにおける民俗研究の原状」(『民俗学評論』26号, 1986)。
  - 4) Richard Weiss, Volkskunde der Schweiz.1946.
  - 5) L.シュミットについては、次の拙訳にやや詳しい解説をほどこした。参照、レーオポルト・シュミット『オーストリア民俗学の歴史』(名著出版 1992)。
  - 6) Lepold Schmidt, Totenbrauchtum im Kultwandel der Gegenwart. Wien 1981.
  - 7) Hermann Bausinger, Volkskultur in der technischen Welt. Stuttgart 1961. (英語訳は, Folk Culture in a World of Technology, translated by Elke Dettmer. Bloomington and Indianapolis 1990).
  - 8) 提唱論文には1962年と1964年の二篇があり、後者には拙訳がある。参照、ハンス・モーザー「民俗学の研究課題としてのフォークロリズム」(『愛知大学国際問題研究所紀要』90/91 [1990] 所収)。提唱者がバウジンガーではないことに注意、ただしバウジンガーはその後の独自の入門書である次の著作では、全4章のうちの一章の表題を「フォークロリズム」としているように、この概念の普及にあたっては大きな力があった。参照、Hermann Bausinger, Volkskunde. Von der Altertumsforschung zur Kulturanalyse. Tübingen 1979. なおこの一章だけは英語訳があり、上記デットマー女史による翻訳に併載されている。
  - 9) 次の拙論を参照。「ドイツ語圏における現代民俗研究とマス・メディア資料の活用—現代日本民俗の資料をめぐる議論のために」(『比較民俗研究』vol. 3, 1991 所収)。またアメリカでの大衆誌への関心を図書館での収蔵状況の面からあつかった最近の文献に次がある。(伊藤順教授 [愛知大学, 図書館学] の教示による)。Robert P. Holley, Is Popular Culture Forgotten? In : ICBC, Vol 22 No1 (1993), p. 13-17.
  - 10) 一般的あるいは大局的な理論を指針として、そこから導き出される仮説を、実際の調査によって検証するという行き方を意識的にとっているのが、テュービンゲン学派の特色でもある。一例を挙げると、新興住宅地などの街路には、アカシア通りとかクロツグミ通りといった動植物名など、伝統的な地名の観念からはみ出るような命名が頻繁であるが、これがいかなる心理や社会的条件によるものかについて仮説を立て、実際の調査や事例の統計化を通じて内容を充実させてゆくといったもので、この方法による多数の成果がある。
  - 11) Ina-Maria Greverus, Der territoriale Mensch. Frankfurt a. M. 1972.
  - 12) Ingeborg Weber-Kellermann, Landleben im 19. Jahrhundert. München 1987.